

現代ドイツにおけるネオナチ・ユーゲントの文化(3)

増井三夫*

(平成7年10月31日受理)

要 旨

従来、ネオナチ・ユーゲントの行動は「単独」であり、「計画され、他から操縦されたものは」少ないと見られてきた。そのうえ、ネオナチ組織の活動について言及する場合にも、それらは個別に取り上げられ、組織間相互の関係についてはいまだ未解明にちかかった。その理由は、ネオナチ組織と活動について、丹念な調査を欠いていたからである。だがこの数年に二つの貴重なデータが刊行された。それは、B. ジーグラの調査と I. ハッセルバッハのネオナチ内部世界の告白記録である。この両者により、ネオナチの裏面がかなり明瞭になった。とくに M. キューネンを「総統」とする指導者ネットワークの存在およびドイツ・アルタナティーベと旧東ベルリンの組織と活動は、上記の見方に大幅な修正を求めるものとなった。またネオナチ・ユーゲントは、国家社会主義イデオロギーに確信をもち、伝統的なドイツ市民社会の価値と国民主義の世界観に、一般市民および同世代よりもはるかに強烈に同一化していた。その行動は、この価値と世界観を「吐き出し、言語化し、行為で表現」するものであった。

KEY WORDS

ネオナチズム Neonazismus ネオナチ組織 Neonazi-Organisationen

はじめに

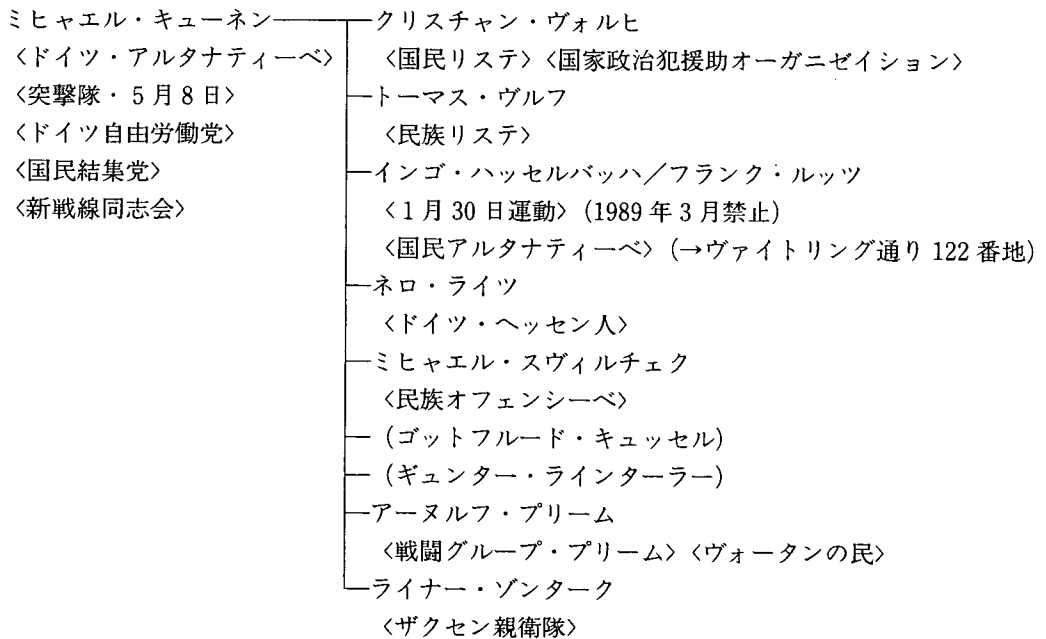
1. ネオナチ・ユーゲント文化「解釈」の可能性
2. 転換期前後の若者の日常生活世界
 - (1) アイデンティティ「危機」・方向性「喪失」
 - (2) 崩壊が進む家庭生活
 - (3) 学校内暴力の日常性
 - (4) 価値多元主義にたいする不適応
(第15巻第1号)
 - (5) 「最高の価値」の実行
「価値」に忠実な若者たち／ナチ巡礼地ク
ヴェドリンプルグの「価値」の実行者
 - (6) 強力な世界観への志向
「健全な新しい国民意識」／ネオナチ・ユー
ゲントの世界観／「精神は焰より立ち現れ
る」／「国民主義」の表出／極右政党の伸長
(西洋教育史研究第24号)
3. ネオナチの組織と行動
 - (1) ネオナチ組織の概観
 - (2) 指導者原理
 - (3) 東ベルリンのネオナチ組織
 - (4) ヴァイトリング通り122番地
 - (5) ドレスデンのネオナチ殉教者追悼行進
 - (6) ネオナチ組織周辺の若者
 - (7) ネオナチ事件簿
 - (8) 「犯人は単独」か
(第15巻第2号)
4. あるネオナチ・ユーゲントの日常性
おわりに

* 教育基礎講座

3. ネオナチの組織と行動

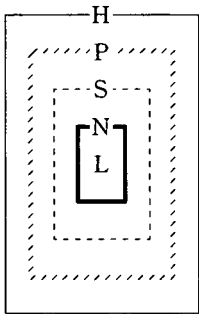
(1) ネオナチ組織の概観

これまでネオナチの組織は組織外から描かれていた。そのために組織間の関係についてこれまで十分な情報はえられなかった。この不備はベルリンでネオナチの指導者であった（活動期間1988年から1993年）インゴ・ハッセルバッハの「告白」録でかなり補われた。ここではその記録にもとづいてまずネオナチ組織の鳥瞰図を描いておこう（〈 〉内は組織名）。



ネオナチ組織は組織の指導者格の人脈がそのまま組織のネットワークと重なっている。人脈は、ミヒャエル・キューネン（1991年4月死亡）を「総統」（代理はクリスチャン・ヴォルヒ）に、以下各組織の指導者が連なる。そして「総統」と各指導者は、ナチの組織に似せた「総統」→「管区長」の関係をなす。具体的には、たとえばドイツ統一の年である1990年4月にやはり東西ドイツの「管区長会議」がフルダで開催されている（この月には東ドイツ最後の政府デメジエール政権が発足していた）。「管区長」組織も東西ドイツ統一以前では「西地区」・「東地区」に2分されていた。4月の「管区長会議」にはハッセルバッハが「東地区長」の資格で参加している⁽¹⁾。この会議で事実上統一後ドイツの「ばらばらである」ネオナチ組織が「管区」体制のもとに編成されたのであった。それでは何故にこのような「管区長会議」体制がとられたのだろうか。それは一言でいえば、指導者原理にたっていたからである。これについて後ほど改めてのべることにして、その前にネオナチ組織内部をそのメンバー構成からみておいたほうがよいであろう。そのさいに組織周辺にいるヒッピー、パンクスそしてスキンヘッドをも視野に入れてみなければならない。

とはいっても組織メンバー構成を、しかもその周辺を考慮にいれて、一般的に描くことは困難である。そこでこの2つを同時に説明するために、一人のメンバーのそれも指導者に至ったヒストリーを例にあげることにしよう。その指導者はハッセンバッハである。かれが旧東地区の指導者へ至ったプロセスはつぎのようであった(詳しくは後述)。かれの両親は社会主義統一党党员であった。かれはまずヒッピー [H] の生き方に共感し、ついでパンクス [P] 仲間に入り、途中数回にわたる刑務所体験を経て、スキンヘッズ [S] からネオナチ [N]、そしてその指導者 [L] へ進んだ。とくに [P] → [N] ルートは一般的であったようだ。かれは友人とともに1988年に「1月30日運動」同志会を結成したマイク・プレツツケが [N] へ進んだ過去をも紹介しているが、それはこのルートに該当していた。



ここで [S] と [N] の違いについても言及しておこう。第1に [S] は、[N] と同一ではないが(またその予備グループとみるのも一面的である)、[N] と共同行動する、第2に [N] は理論武装集団である、ということだ。第1の点は、指摘されているほどに当事者側からのデータは揃っていないわけではない。そこでつぎにハッセルバッハの記録から1例を紹介しておこう。それは、1990年8月ヴンデジール(1987年にルドルフ・ヘスはここで死亡、世界中のナチのメッカ)で開催されるヘス追悼行進参加までの道中記録に詳しく描かれている。この行進は戦後最大規模のネオナチ行進となったものだ。この月にちょうど東西政府が「両ドイツ統一条約」に調印していた。転換を徴する出来事が相次いでドイツ現代史に刻まれていくこ

ろだった。ハッセルバッハは8月18日夜11時にベルリンのヴァイトリング通り122番地をたった(翌早朝6時到着)。貸切バス5台を連ねた道中となった。この5台に乗った大多数の300人が、じつは、[S] のフリーガンだったのだ。一行は40キロメートル走ったところでレストハウスに休憩をとった。300人のフリーガンは店員の目の前で酒、煙草はいうにおよばずラジカセ、CDプレーヤーまでを強奪した。「S」はこのように [N] の先兵として、暴力による無法地帯を作りだしていた。ほかならぬ、この行為こそが[S]の役割だったのだ。なぜか。それを「総統」キューネンはこのように語っていた。「不満の渦巻くあらゆる地に」、「暴力が支配するあらゆる地に」ネオナチが出向いて「革命」を起こさねばならず、そのために「不満を煽り」「暴動を起こさせる」のだと⁽²⁾。この理屈が、ネオナチに、フリーガンに暴力と無法行為を容認させたのであった。

スキンヘッド(フリーガン)が暴力をふるう背後にネオナチが存在していた。外部の目には、この両者は同一にみえ、この区別は見えがたかった。現実も、この両者の境は重複していた、とみたほうがよい。スキンヘッズでネオナチ組織メンバーである者がいた。このメンバーが指導者の直接の「子分」となっていた。だがスキンヘッズは、ネオナチとはちがって、イデオロギーとは無縁だったことに留意しておかねばならない。

第2の点である。まさしくスキンヘッズ [S] とネオナチ [N] の違いを際立たせるものはこのイデオロギー性にあった。ハッセルバッハはネオナチ内部の世界を、「数多くの極右にとっては、国家社会主義イデオロギーはもう確信の域に達している」と語っている⁽³⁾。ネオナチ内部では日常的に「学習会」と「合宿訓練」がもたれていた。だが現実「国家社会主義イデオロギー」を「確信」するネオナチの数は少ない。1990-1993年にネオナチの指導者の一人であったハッセルバッハでさえも交流のあった人数は10人台であった。人数が重要なものではなかった。ネオナチ幹部組織がまさしく指導者 [L] と数人で構成されていたからだ。

(2) 指導者原理

ここでゴットフリード・キュッセル（1991年4月以降キューネンの後継者）が作成したネオナチ組織の「学習資材」から「指導者に求められるもの」をみてみよう。「指導者に求められるもの」は「判断力」「説得力」「精力と持続力」「鼓舞させる力」「賞賛と叱責」である。「判断力」は「最善の方策をとることができ」、「どのような子分を持」ちかれらが「困難を乗り越える意志があるか否か」とさらに「自分の能力の限界」を「見極める」ことができること、である。「説得力」は「目標にむかって全員を邁進させ」ることである。「精力と持続力」は、「この世界の精神、意志の象徴であらねばならない。」「鼓舞させる力」は、「指導者に導かれる者たちを鼓舞し」、かれらの「活動力」を持続的にかつ確実に「目標に到達でき」るようにすることである。そして「賞賛と叱責」について、「叱責」はその「理由」があるばあいのみとし、しかも「その本人より低い地位の者の前では絶対に回避」すること、「賞賛」は「全員の前でやること」⁽⁴⁾。

ネオナチの世界観が幹部組織にもっとも純粋に体现されていることはすでにみた（第2章）⁽⁵⁾。この組織は上記の能力を学習と訓練によってマスターした指導者組織と言いかえてもよい。その指導者は日常生活世界ではどのように一般市民の目に映っていたのだろうか。野村志乃婦さんは、ジグラー同様に、ネオナチの「堅苦しいまでの行儀のよさ」をまず強く印象づけられたといっている⁽⁶⁾。たしかにこの「学習資材」から彷彿とさせられるものはそうした印象をまず第1にあたえる模範的で真面目な教師像に似たイメージである。1994年マンハイム地方裁判所判事さえも、あの「ホロコーストの嘘」を広めたかどにより執行猶予つき懲役1年の判決をくだしたドイツ国家民主党党首デッカートを「明確な政治的信条をもった、意志強固で責任感の強い人間」と評した⁽⁷⁾。これはけっして偶然なことではなかったというべきであろう。これを読んだときすぐに脳裡に閃いたものは、フレデリック・フォーサイスの『オデッサファイル』の最終シーンであった。緊迫したシーンが続く。フリーのジャーナリストミラーがついに西ドイツに暗躍するホロコースト元SS司令官で西ドイツのコンツェルン会長ロッシュマンを追い詰めた。その元司令官に向かってミラーはホロコーストでの残虐なユダヤ人殺戮の責任を激しく追求する。それにたいしロッシュマンは、ホロコーストSS隊員に代表される勤勉で秩序正しく、よく訓練されさらに意志強固で責任感の強いドイツ人が西ドイツの奇跡の繁栄を築き、その繁栄をいま享受しているのが君ら若者だと切り返す。小説とは思えないリアリティがあった。

ネオナチ組織にこのような能力を備えた者が一人いればよいのだ、と「総統」キューネンは断言とする。この各組織指導者は同時に組織が所在する地域の「管区長」となった。「総統」のもとに全国的な幹部組織のネットワークが張り巡らされた。「総統」は「唯一絶対的な威力を発揮」した。さらに「総統」はじめ他のネオナチ指導者は海外組織KKK（北米人種差別擁護秘密結社）やUSA「ドイツ国家社会主義労働者党・海外組織」と接触していた。これが、指導者原理もとづくドイツのネオナチ組織の実像であった。

この体制は「総統」キューネンのトップ指導者としての能力とセンスに負うところが極めて大であった。そこで、最後に、そのキューネン像を、間近で観察していたハッセルバッハの言葉で、紹介しておこう。キューネンは「西ドイツネオナチショナリズムの真の創造者」であり、「模範となる」指導者であった。演説は聴衆を「熱狂させ」た。かといって「頑迷・主義にはまり込んでいない」。「私生活と政治生活を区別」していた。その影響力は、ハッセバッハをし

て、「魔術師のそれで、ちょっとやそつとで逃れられるものではなかった」といわせしめた⁽⁸⁾。このキューネン像をちなみにかれの後継者と目くされ、キューネンの「最高の友」であったクリスチャン・ヴォルヒの人物像と比べてみよう。ヴォルヒも「決して見くびることのできない」「民族主義的社会主義者」であり、「非常に自制の利く人間で、同志連帯意識の強い男であった」。その外見は「お決まりの堅気のドイツ人像にぴったり」で「きちんとした身なり、手入れの行き届いた体裁、髪を几帳面に分けている」。ところが「演説で聴衆を熱狂させること」になると、かれは「総統」にかなわなかった⁽⁹⁾。だがそのヴォルヒも、「国民リスト」の党首として、これをドイツでもっともラディカルな組織に仕上げた。

(3) 東ベルリンのネオナチ組織

東ドイツにおけるネオナチの非合法組織は、W. マゼルの最新の調査によると、すでに1980年代後半に存在し、ドイツ社会主義統一党 (SED) の極秘調査で記録されていた (1988年当時でファシズム同調者は10%)⁽¹⁰⁾。東ドイツの公式見解ではファシズムの存在はありえないということになっており、反ファシズム運動は抑圧されていた。だが東ドイツ内務省は1989年12月に「DDRにおけるスキンヘッド・グループの活動の最盛期は84年から87年の間」であったと報告せざるをえなくなっていた⁽¹¹⁾。

東ベルリンではリヒテンベルク地区がネオナチの拠点であった。ハッセルバッハは1972年にここへ転居し、青春-青年時代を過ごした。そこにはヒッピーからパンクスを経てネオナチ指導者へ歩み、そしてそこから離別した約20年が刻み込まれていた。1988年にネオナチ活動を開始した。同年にネオナチ組織「リヒテンベルク戦線」を結成した。「戦線」のメンバーは、1987年10月17日にシオン教会で開催されたパンク・コンサートを襲撃した中核部隊であった。「戦線」は、この時点では「サブ・カルチャ的な周辺集団」に甘んじていたが、しかしこの襲撃が非常に厳しい批判を招き、刑事処罰者を出したために、市民世論の支持をえられるように衣替えをした。それが同年に結成された「1月30日運動」組織であった (1989年解散)。この結成の中心人物もハッセルバッハとフランク・ルッツだった。「運動」が掲げた行動目標は「ドイツの再統一」と「非ドイツ的な生活スタイル」の排除であった。ハッセルバッハによると「運動」結成は、集中的な理論武装 (国家社会主義・ナチ時代の発禁書の学習) を経てなされたものであったという⁽¹²⁾。この結成メンバーを中核に本格的なネオナチ組織が結成される。それが西ドイツの最大組織「ドイツ・アルタナティーベ」の東地区組織である「国民アルタナティーベ」であった。

「ドイツ・アルタナティーベ」は1989年5月5日ブレーメンで、「自由ドイツ労働者党」同地区連盟を母体として結成された。この結成に姿を現した人物こそがキューネンであった。キューネンはアルタナティーベの議長に「自由ドイツ労働者党」黨員 W. マッテーイを選び、アルタナティーベ自体を従来の極右組織を「ネット化する」センターに仕上げた。次いで1990年1月にアルタナティーベはボン近郊で公然と全国大会を開催し、4月に西ドイツで政党として登録された⁽¹³⁾。キューネンはこの活動と並行して、とくに東ドイツへの浸透を狙い、地区組織の拡充を図った。1989年の12月22日にコトブス、29日にドレスデンにアルタナティーベの地区連盟が結成された。

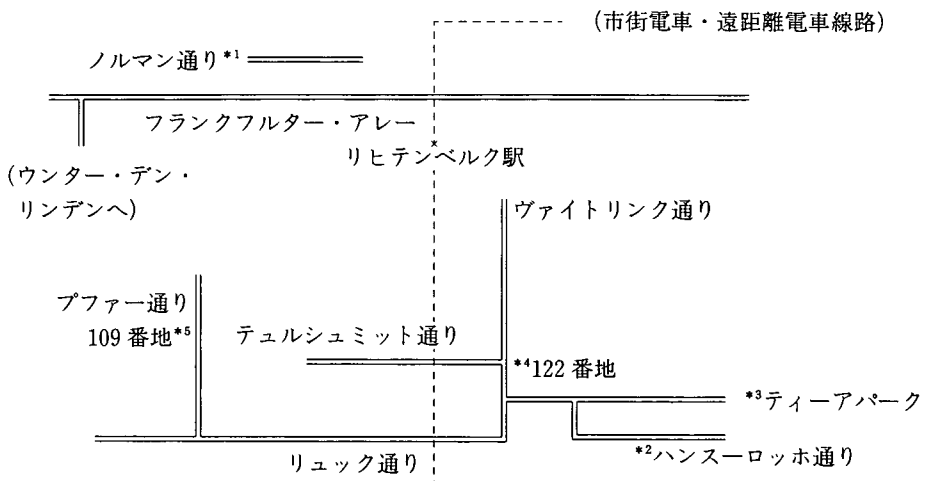
一方、東ベルリンのネオナチは1989年11月の壁解放で「思いきり暴れまわる自由空間という好条件」が到来したとみていた⁽¹⁴⁾。東ベルリンにおけるアルタナティーベ結成については、1990

年1月に西ベルリンでキューネン、ヴォルヒ、ネロ・ライツとハッセルバッハとの間で最初の折衝が開始された。続く2月2日から4日(ハンブルク)、ヴォルヒ、トーマス・ヴルフ(民族リスト)、ユルゲン・リーガー(ネオナチの弁護士)およびハッセルバッハの間で東ベルリンにネオナチ党組織結成が協議され、その党名に「ドイツ・アルタナティーベ」がもち出された。だがこの党名では公認が得られない恐れがあると懸念され、結局「国民アルタナティーベ」となった。活動目標は、ドイツ統一の即時達成、外国人流入阻止、ドイツ中立、環境保護等であった。とくに統一については東ドイツ市民の当時の声を代弁するものでもあった(統一支持は、1990年2月末/3月で女性80%・男性88%⁽¹⁵⁾)。

(4) ヴァイトリング通り122番地

1990年代始めのリヒテンベルク地区。街はヒッピー、パンクスであふれていた。ここはまたシュタージ——東ドイツ秘密警察(国家保安省)——本部(地図*₁)が建ち、そして東西ドイツのネオナチが接触する場でもあった。5月以降「民族移動」にも似た東欧からの難民が大挙来襲した。なかでもローマ・シンティ(ジプシーの正式名)の数が他を圧倒していた。ハンスーロツホ通り(地図*₂)に難民収容施設が設置された。その東端にあるティーアパーク(地図*₃)にはベトナム人労働者用のアパートがすでに建てられていた。

1990年2月ハッセルバッハはリヒテンベルク地区の住宅を「非合法で乗っ取った」。不可解なことに、地区住宅管理協会は、その建物が文化財保護指定になっているという理由を上げて、それに代わる建物を数軒「紹介」した、というのである。ハッセルバッハはヴァイトリング通り122番地(地図*₄)の住宅を選んだ。この建物が後に世界のジャーナリズムに注目され、それが逆にネオナチの存在を世界に発信させる効果を発揮することになった。「ある日本のテレビは、重装備教練しているところを撮影させてくれれば10,000マルク出そうと申し出た。」こうしたジャーナリズムから入る「謝礼」が組織の資金になったのだ。「国民アルタナティーベ」には「ものすごい数の党員希望者が殺到」した。組織はドイツで党員数最大を誇ることになった(同



年夏に約800人)⁽¹⁶⁾。

1990年3月、ランゲンで初の東西ドイツ合同ネオナチ首脳会議がもたれた。ここでキューネンはヴァイトリング通り122番地の建物を東地区の活動拠点とすることを決めていたようだ。4月の第1回管区会議後、キューネンはここに「戦闘経験豊富な」オーストリア人ゴットフリード・キュッセルとギュンター・ラインターラーを派遣し、その管理に当らせた。ハッセルバッハに「何のことわりもなく」決定された。キューネンの「意向」は、ヴァイトリング通り122番地から「全ドイツに向けて狼煙をあげ」ることにあつた。そのためにハッセルバッハらを「常にコントロール下に置いておける」ようにした、という言い分であつた。ヴァイトリング通り122番地におけるハッセルバッハの地位は「家長、及びスポークスマン」であつた⁽¹⁷⁾。ヴァイトリング通り122番地は12月まで東西ドイツネオナチのセンター（「寄合所」）となつていた（同日に退去命令）。すでに7月にはコップスで第1回「ドイツ・アルタナティーベ」大会が開催され、ハッセルバッハはキューネンに次ぐ次席党首に任命されていた。「ドイツ・アルタナティーベ」は1990年10月3日のドイツ統一以降、新5州（旧東ドイツ）中最大の組織となつていた。東ベルリン刑事警察中央本部未公開報告書（1990年2月20日）によると、東ドイツではすでにネオナチ組織の「ネットワーク」が作られていたのであつた⁽¹⁸⁾。

(5) ドレスデンのネオナチ殉教者追悼行進

1991年7月、ドレスデンの市中で繰りひろげられたライナー・ゾンターク追悼行進はドイツ連邦共和国史上最大のネオナチ行進となつた。ゾンタークとは何物か。ジークラーはかれを典型的なネオナチ指導者のように描いていた。だがハッセルバッハの評価はかなり手厳しい。まずは追悼行進までの経緯をおってみよう。

ゾンタークは「ナゾの方法」で西ドイツに渡り、一時フランクフルトに滞在していた。1987年にヘッセン州ランゲンでキューネンと接触している。キューネンはゾンタークを、「ストレートな行動とドイツへの率直な政治的心酔で有名」で、「国民同胞たちの社会や心の諸問題に通じている」と、かなり好意的な評価をくだしていた。その後ゾンタークはドレスデンに戻り、ネオナチ組織の結成に着手し、89年11月の壁解放後に「ザクセン親衛隊」を結成した。そして90年10月、統一17日後に、同市で合法的なネオナチの行進を演出した。約500人の隊列の先頭にゾンタークはキューネンとともに立った。1991年6月1日夜、「セックスの帝王」を襲撃するために集合していた。だかかれは何者かによって銃殺された。このときの状況と犯人の記述について、ジークラーとハッセルバッハでは異なっている。ジークラーは、23時50分に突如近づいてきたメルセデスベンツからゾンタークは狙撃され、その犯人はマンハイム出身の若者2名で、ともにセックス・ショッピングセンターの従業員とみている。ハッセルバッハは、ゾンタークと顔見知りのギリシャ人「女郎屋」シメオニデスの散弾銃で銃殺された、としている。ゾンタークは「殉教者」に仕立て上げられ、その追悼行進が6月15日にドレスデンの市中で行われた。その行進にはキューネンの後継者キュッセルほか2千人が全ドイツから集まった。その中にはナチス突撃隊SAとドイツ女子青年同盟BDM（ヒトラー・ユージェントの下部組織）の制服・コスチュームを着用したスキンヘッズも含まれていた。ゾンタークが襲撃されたとする現場前で、ナチ式の敬礼と「ジーク・ハイル」が歓呼された。これに「こっそり喝采する市民が」沿道に混じっていた。警察は見てみぬふりをしていた。もちろんこの追悼行進はドレスデンの市長の許可を得ていた⁽¹⁹⁾。以上が追悼行進までの粗筋である。それでは、ゾンタークはなぜ「セッ

クスの帝王」を襲撃する必要があったのか。

ゾンタークのスローガンは、「秩序と染み一つない清潔さが支配しているドイツ」、「心暖まる家庭」を作りだし、「自分たちがドイツ人であることを自覚し、そのことに誇りをもつ」ということにおかれていた。この文章はごく普通の市民の日常生活感覚でも共感を得られるものであった。そしてその行動目標は、売春、麻薬、同性愛、外国人、ユダヤ人に向けられ、これらを「一掃」することにすえられた。ここまではすでにわれわれもジグラーからの情報で承知している⁽²⁰⁾。だがこれは顔面通りには受けとれない。ハッセルバッハによると、ゾンタークはフランクフルト滞在中にここの「暗黒街で売春婦のヒモとして、名を馴せていた」。これはハッセルバッハがキューネンから直接聞いたことであった。ドレスデンでは「ドレスデンの保安官」と名のり、麻薬売買・賭博・売春の一掃を図っている、とテレビのインタビューに語っている。だがいま一つの顔は、売春斡旋業者から「ショバ代をカツアゲ」するヤクザの顔だった。ショバ代を払わないと「潰してやる」とかれらを「脅していた」。この脅しに抵抗した「女郎屋」がかれを射殺したシメオニデスであった、というのである⁽²¹⁾。

ゾンタークは「たかだかヒモ」である、という評価はネオナチ首脳の共通認識であった。そのかれを「殉教者」に仕立てたのもヴォルヒ、ライツ、ハッセルバッハらの首脳であった。ヴォルヒは「実際に起ったことなんてどうでもいいんだ。肝心なのはタイミングよく、殉教者ができたことだ」と本心を語っていた。「ライナー・ゾンターク、帝国のために殉教す」と書かれた文字がこれ以降ナチの行事で掲げられることになった⁽²²⁾。ゾンタークはいまやドイツ市民の日常性にあるドイツ的な価値（「秩序と染み一つない清潔さ」と「心暖まる家庭」）——それはドイツの心性に宿るロマン主義的な「民族誌的原像」（モッセ）といい換えてもいいものであり、とくに「清潔」のコトバがアウシュビッツのガス室に通じる脱衣部屋の壁に貼りつけられていた（映画「ショーア」の証言より）ことも書き添えておかねばならない——を表出させる象徴となり、「殉教者」はこのネオナチ世界観の正統性を市民にアピールする象徴と化した。統一後のネオナチ運動はこの「原像」の上に繰り広げられたのだ。ドイツ統一がまさしくこの「原像」が解き放たれる「自由空間」を生み出したとみるハッセルバッハの感性は鋭い。

(6) ネオナチ組織周辺の若者

ネオナチの情報を読むとき、われわれはその指導者とかれの周辺にいる若者を区別しておいたほうがよい。さきにも指摘したように、その若者はスキンヘッズとネオナチの両方に重なっているグループだ。ネオナチ組織内部は、これも紹介したように、「国家社会主義イデオロギーはもう確信の域に達し」た指導者群とその予備グループ、この両者の周辺にいる若者からなっていた。その若者をネオナチ組織へ引き入れることも、ネオナチの重要な活動だった。

1990年2月にヴァイトリグ通り122番地がネオナチの中心地となって以降、ここに「方向性を失った十代の少年たちが毎日やって来た」。ハッセルバッハらネオナチはこの少年たちを「国民アルタナティーベ」や他の組織に「送り込んだ」⁽²³⁾。この世代の若者がネオナチの潜在的な予備グループでもあったとみられる。かれらがネオナチ組織に入る動機と訓練を組織内部からみたハッセルバッハの記録は生々しい。

1991年7月にハッセルバッハは、「国民アルタナティーベ」と「縁を切って」⁽²⁴⁾、マイク・ブレッツケ、フランク・ルッツとともに新たな「同志会」を結成した。ハッセルバッハは「同志会」に入会を希望する若者たちの心理を描いている。かれらは「同志会」のメンバーに話しか

けようとする。その「若者の大半は、欲求不満の思いを抱」き、「将来の見通しも暗」かった⁽²⁵⁾。これはまさしくジャーナリズムが、アイデンティティ危機・目的喪失といった現象だ。だがそれだけでは自動的にネオナチの組織員にはなれない。そのあとの歩みがこれまで謎に包まれていたのだ。ネオナチは、若者たちのこうした心理の「上にたつて」、「機会を見つけては彼らを褒めて」やった。「お前にも価値があるんだ。」その時にかけた言葉がこれであった。若者はその評価を求めていたのだ。ハッセルバッハらは、若者たちにそうした価値を与えるテクニックもっていた。あの指導者原理が若者の心理を捉えていたのだ。若者は「そうした評価を得られるがために」、「同志会」に「従属しきった」。このとき「同志会」は、その若者にとって「絶対にやめられない、ある種の麻薬のような作用をした」という。そうなると、若者は「同志会」から「一歩でると、自分自身について何の評価も得られないため孤立してしまい、他の世界とのコンタクトも失われがちである」⁽²⁶⁾。要するに、そうした心理にある若者たちは「指導者」と「助けを求めている」のだ。この若者たちから、「国家社会主義イデオロギー」を学習し、そのイデオロギーによる結末に重きをおくネオナチ・ユーゲントが誕生するのだ。もちろんそこまでいわずに、スキンヘッズの「団結」と「連帯感」にあの価値を見いだして、過激な行動に走るものもいた。ネオナチ・ユーゲントは、アイデンティティ危機・目的喪失といった「世代状況」のなかで、その解決をネオナチ指導者と組織に求めたグループ（「世代連関」）の内の、同一の世界観と行動志向によって統一された世代だということができよう⁽²⁷⁾。

(7) ネオナチ事件簿

ネオナチ犯罪「単独犯」説の出所は二点ある。第一は、司法機関が襲撃事件（放火・殺人）に刑法第129条（テロ団体の会員所属、設立、勧誘）を適用せず、これを単独の刑事事件として訴追していることにある⁽²⁸⁾。第二は、1993年6月発表の連邦女性青年省報告『外国人敵対暴力。犯行者の構造と波及過程の分析』（調査期間1991年1月から1992年4月、調査の対象とされた外国人敵対事件は1,398件）である——この報告によると、組織犯は6%にすぎず、単独行為が顕著であったとされた——⁽²⁹⁾。多くのネオナチ報道や研究書はこの二点を根拠に「単独犯」説を支持していた。これに対してジューグラーはこの説を否定する調査結果を詳述している。以下ではその一部を、事件名簿とともに、紹介しておきたい。最初に1989年から1993年5月までの主な事件簿を簡略に列挙しておこう（なお〔 〕内は事件そのものではないが、関連情報を記したものである）。

〔1989年〕5月、トルステン・ハイゼ（22歳）はレバノンの難民申請者1名をジープで轢き殺そうとした。5月、トルコ国籍のウフク・ザビン24歳はベルリンの市街電車（Sバーン）駅ヴェテナウ構内で29歳のネオナチに刺殺される。11月7日、グルフティー（ロック・ミュージシャン風の長髪・服装をした若者）ノベルト・ヴァイトナー（19歳）をスキンヘッズが革長靴と鉄パイプで襲撃した（犠牲者は脾臓破裂、頭蓋骨骨折、打撲傷を負ったが、存命）。

〔1990年〕1月、ベルリン自由大学学生パキスタン人マームト・アーザルは生科学研究所建物前でドイツ市民によって消化器で殴殺された。4月20日（ヒトラー誕生の日）、東ベルリンでサッカー試合終了後約500人のネオナチとスキンヘッズがアレクサンダー広場で外国人を襲ったり、広場前の駅構内でホモ・バーを襲撃した。5月1日、ホイヤースヴェルダ市（旧東）で4人のネオナチがモンザビーク出身の労働者を殴打した。6月ネオナチとスキンヘッズ約150人が東ベルリンリヒテンベルク地区ハンスーロッフホ区の難民収容施設を襲撃した。11月、エーバ

スヴァルデ市(旧東)でネオナチ約30人が4人のアンゴラ人を殺害した。11月2日(統一前夜)、ゲルリッツで「ドイツ・アルタナティーブ」と「国民主義戦線」などの約100人のネオナチがポーランドへの侵入を謀った。エーバスヴァルデ市(旧東)でネオナチ約30人が4人のアンゴラ人を殺害した。31日、2名のネオナチがゲッチングン市ロズドルフ区でトルコ人の男性を刺殺した。12月31日未明、ドレスデン市でネオナチがコーヒー店を放火した。

[1991年] 3月18日、約100人のネオナチがアイゼンヒュッテンシュタットのフランス系ローマ・シンティ(ジプシーの正式名称)の車を襲撃した。3月30日、リーザでスキンヘッズがコンサートを襲い、歌手が重傷を負った。4月8日、オーデル河畔フランクフルト市で約250人のネオナチがポーランド国境遮断器撤廃時に「ポーランド人はくたばれ」と叫び、ポーランド人の通行を妨害した。4月12日、ゲルリッツ国境で15人のネオナチがポーランド人夫婦の車を襲撃(夫婦は頭部と足を負傷)。4月19日、ベルリン市で3人のネオナチが1人のナミビア人を市街電車中で殴打した(被害者は入院)。4月20日、ベルリン市でスキンヘッズ数人が1人のルーマニア人亡命申請者を走行中の電車から突き落とす(わたくしも試したが、市街電車のドアは走行中でも少し力をいれれば開けることができる)。ライブチヒからルブリン行き列車内で約20人のスキンヘッズがポーランド人旅行者を「ポーランドのブタ」などと叫んで嫌がらせをした。4月28日、ユータボクでナイフや指に鉄輪をはめたスキンヘッズが外国人グループを襲撃した。5月1日、ゾンドルスハウゼンで警官1人がネオナチによって重傷を負わされた。5月5日、ベルリンで8人のスキンヘッズが2台のトラバント(旧東時代の大衆車)を襲い、車中の人たちを棍棒で殴打した。5月15日、アールベックでポーランド人がスキンヘッズにナイフで刺され重傷を負った。5月18日、ベルリンでスキンヘッズがゾングースフゼン区のキャンプ場を2度襲撃した。5月26日、ベルリンで約70人のネオナチがマールズドルフ区のホモ・レズ祭りを襲撃した。6月1日、ノイブランデンブルクで40人のネオナチが難民収容施設を襲撃した。6月14日、イエナでトルコ人サッカーチームがスキンヘッズに殴打された。6月26日、シュトゥットガルト地方裁判所におけるナチ突撃隊上級隊長J. シュヴァムベルガーの審理開始時に、ネオナチが同裁判所前で「反ドイツ的な、一方的な残虐行為宣伝はやめろ」と要求した。7月、ミュンヘンで21歳の国防軍兵士が5人のトルコ人に発砲した(内2人は重傷)。ハノーファーで4人のスキンヘッズが浮浪者1人をナイフで刺殺した。ハンブルクのレストランで5人のトルコ人が5人のスキンヘッズに頭部を蹴られて重傷を負った。ノルトハイムで約15人のスキンヘッズが3人の外国人を襲った。29日、ゲルリッツで3人のドイツ人が難民収容施設を襲撃した⁽³⁰⁾。

[1992年] 8月22日、ロストックで難民収容施設がネオナチに放火される⁽³¹⁾。9月26日、オーニエンブルクでザクセンハウゼン強制収容所跡第38収容棟が放火される。11月23日、メルンでネオナチがアパートに放火し、トルコ人3人が死亡し9人が負傷した。11月29日、エーバスヴァルト難民収容施設(ルーマニア人、ブルガリア人、アフリカ人が宿泊)を放火した。[ロストック事件からメルン事件まで、ネオナチの犯罪は2倍強の1,200件に増加した⁽³²⁾。]

[1993年] 1月9日、エアフルトでベトナム人の難民申請者4人が約8人のネオナチに殴打され、踏みつけられて負傷した。1月10日、チューリングンで20人のネオナチがディスコを襲撃し9人が負傷した。[1月20日、バーデンヴェルテンベルク州内務大臣F. ビルツェレは、1992年度の外国人敵対犯罪報告で、「暴力の恐るべき増加」について言及した。南西ドイツにおいて737件の犯罪が発生し、これは前年1991年に比べると77%の増加であった。また放火は50件で前

年度比で156%の急増であった。南西ドイツ7都市（テニゲン、ケンドリンゲン、ウムキルヒ、プライザッハ、ヘッペンハイム、プフレンドルフ、カールスルーエ）のネオナチの統合が企図されていた⁽³³⁾。] [2月3日、全国一斉にネオナチ系の音楽グループとプロダクションの家宅捜査が実施され、1万枚のレコード、CDおよびビデオテープが押収された。これらは暴力を賛美しかつ外国人種憎悪を煽るものであった⁽³⁴⁾。] [2月6日付連邦憲法擁護局報告によると、1992年度外国人敵対暴力事件数は1991年度と比べて50%増の2,285件、死者17人に上った。一方、連邦内務省も暴力事件の90%が外国人敵対暴力であったという「不名誉な決算」を報告した。この報告では、実行犯が青少年と成人であったが、しかしこの行動が組織によって指令されたものであるとは確認されえなかったと指摘されている⁽³⁵⁾。] 5月28日、ゾーリンゲンでトルコ人宅が放火され、5人が死亡した。

(8) 「犯人は単独」か

1993年2月6日の連邦内務省報告（報告者は内務大臣ザイタース）は犯人単独説を政府が公的に支持した文書であるが、同時にこれは事態の一面を語ったものにすぎなかった。それにもかかわらずこの単独説はなかなか修正されなかった。だがジーゲルトの調査は単独説を根底から覆すものであった。その数例を上記の事件簿から取り出して紹介しておきたい。

〔1989年5月事件〕レバノン人がジープで轢き殺されようとした事件である。犯人はネオナチのハイゼで、しかも「自由ドイツ労働党」の活動家であった。ニーダーザクセン地方裁判所は、「白昼の殺害意図はハイゼについて立証できない」として、「危険な道路交通違反」とみなした。ハイゼは刑事訴追を免れた。ところがかれはその直後に「合法性への絶縁状」を法廷に送りつけて、「わたしは暴力によらない政治闘争を地下から国民のなかに運びつづけるだろう」と宣言したのである⁽³⁶⁾。

〔1989年11月7日事件〕ノベルト・ヴァイトナー他8名はボン市ポスト通りで19歳のグルフティーを革長靴と鉄パイプで襲撃し、ボン少年参審裁判所で審理された。検察側の告訴事由は、故殺ないし謀殺でなく、殺傷であった。4月の判決は、政治的動機が認められないし「計画的な犯行」とも立証できないという理由で、ヴァイトナーが少年刑罰18ヶ月の執行猶予、他が拘禁2週間の執行猶予となった。ところが、ヴァイトナーは「自由ドイツ労働党」に加わり、さらに「共和党」党員行進のリーダーであった。1981年11月から90年2月までボンで活動していた。さらに共犯者5人全員も「自由ドイツ労働党」党員であった。ヴァイトナーは6月にはドレスデンのゾンタークの「追悼行進」に参加していたのである⁽³⁷⁾。

〔1990年6月事件〕事件簿を概観すると、この事件が難民収容施設襲撃としては初めのころにぞくすようだ。襲撃はハッセルバッハを指導者とする「国民アルタナティーベ」党員とヴァイトリング通り122番地に集まっているスキンヘッズによって企てられた。ハッセルバッハ自身これが「初の難民収容施設襲撃」と語っている。その襲撃は「時間をかけて、綿密な「プランを練」って実行にうつされ、武器に石と火炎瓶が使われた。ネオナチが襲撃し、スキンヘッズは施設の壁にビラ「外国人は出ていけ」をはった⁽³⁸⁾。この事件はその後の難民収容施設襲撃の一つのモデルとなったようだ。

〔1990年12月31日事件〕ゲッチンゲンでの事件の犯人ジーモンズとシャルフはともにネオナチであり、「自由ドイツ労働者党」の党員であった。検察庁はこの犯罪を「一般故殺」と認定した⁽³⁹⁾。

これらの事件でみられた犯人は、1990年6月の襲撃事件を除けば、いずれも「自由ドイツ労働者党」の党員であった。この組織は「ドイツ・アルタナティーベ」と「国民アルタナティーベ」の母体であり、その党員は事実上両アルタネティーベの党員と重なっていた。とくにヴァイトナーの行動はドレスデンのゾンターク「追悼行進」にも及んでいた。この行進が「自由ドイツ労働者党」、「国民主義戦線」およびネオナチ約2千人の共同行動であったことも想起されるべきである。また1990年6月の襲撃事件も150人で企てられた組織的・計画的な行動であり、決して数人の衝動的な犯罪ではなかったのである。

このように単独説は警察および検察当局によって創作されたものである可能性が極めて強いものであった。だがこうした虚構は内部から崩れることになった。

ネオナチの影響はすでに1985年から旧西ベルリン警察内部にも及んでいた。1993年2月にネオナチの武器訓練指導者が志願警察予備隊（FPR）メンバーであったことが暴露されたのである。これが発覚した経緯は1月に12人のベルリン市民が武器密輸を摘発されたことにあった。2月3日におこなわれた警察署長 H. ザバーシュニスキイ氏の調査報告（この調査は1992年末に開始されていた）によると、実行犯の内訳は、5人はFPRの現職者、5人は除隊者、2人は志願したが入隊試験に落ちた者であった。問題の糸は、5人のFPR現職者の入隊に直接関与した2人の警察署試験官から出ている。試験官2人は、5人中少なくとも3人が武器の取扱に熟達していたことを承知しており、さらに他の3人が1989年にベルリンで「自由ドイツ労働者党」の創設に参加していたことも摺んでいたものであった。だが、FPRにネオナチの影響が浸透していたことなど全く考慮の外にあった。同日（2月3日）、警察官採用責任者 E. シェーンベルク氏は今回の事件を「信じられない」とのべ、FPRの解体を求め、内務省もFPRの「速やかな解散」を要請した⁽⁴⁰⁾。世論は両者の声明で一旦沈静したかにみえた。しかしこの問題の根は当局が予想していたよりも深くはっていたのであった。『デア・ターゲスシュピーゲル』紙は再びこの問題を告発したのである。

同紙によると、警察は既に1985年の時点でFPR内部にネオナチの存在を調査確認済みで、例えば当時25歳の M. アバスーヤコブはベルリンの極右の「武器指南役」であった。かれは1985年3月8日にシャルロッテンブルク宮殿北に位置するポピッツヴェーク通りの自宅で捜査官を前にしてピストル自殺を謀った。その室内の壁には手榴弾、マシンガンそれにヒトラーの写真が掛けられてあった。警察はこの事件をネオナチの組織的な犯行とは全然認識していなかった。警察は他に11人（年齢18～25歳）についても調査を進めていたが、この若者たちがネオナチであるとの確証をえることができなかった。だが、当時実施されたFPRの審査は不十分であったのである。一方、今回の事件をきっかけに2,400人以上のFPRメンバーの再審査が実施された。その結果は、約550人が疑わしいとでたのである⁽⁴¹⁾。このデータは1985年から進められた警察内部へのネオナチの人的ネットワーク化が1993年にかなり成果をおさめていたことを示すものとなった。この年には過激な極右組織「国民主義戦線」が創設されていたのだ。

さらにショッキングなニュースが続いた。ネオナチがボスニアの傭兵となっていた事実が明るみに出された。これはハンブルク州憲法擁護局議長 E. ウーアラウ氏が「ドイツにおける政治的に動機づけられた暴力」を検討する連邦議会内務委員会の席上で報告したものであった。氏は続けて、ボスニアから帰還したネオナチが国内でその「戦闘経験を確実に生かそうとするであろう」と警句を発していた。この時点で州憲法擁護局は、ネオナチが組織的な活動を非常に強化していた、と認めた。そしてついに連邦憲法擁護局自体も1993年4月19日にこの事実を承

認せざるをえなくなったのである。だが同連邦擁護局のヴェルテバッハ氏は、このネオナチの活動も、新難民法が施行されれば減少するという認識も表明していた⁽⁴²⁾。

このように、司法機関、とりわけ1993年6月の連邦女性青年省報告で共通に認識されていた「単独犯」説はすでに4月の時点で連邦憲法擁護局で明確に否定されていたのである。連邦憲法擁護局は「組織犯」説を表明した。さらに連邦議会もこの「組織犯」を同時に「政治的に動機づけられた暴力」として論議せざるをえなくなった。これは、これまであまりにも政治的な思惑と外的要因に還元する社会学的行為理論の自己破綻とでもいえるべきであろう。

註

(第15巻第1号と西洋教育史年報第24号の註で初出された引用文献はここでは前掲書の表記で示す。)

- (1) インゴ・ハッセルバッハ『ネオナチ 若きリーダーの告白』(野村志乃婦訳) 河出書房新社、1995年、70頁。
- (2) 同上78頁。
- (3) 同上158頁。
- (4) 同上166頁。
- (5) 増井三夫「現代ドイツにおけるネオナチ・ユーゲントの文化(2)」『西洋教育史研究』(筑波大学外国教育史研究室年報) 第24号、1995年、40頁。
- (6)(7) インゴ・ハッセルバッハ前掲訳書「訳者まえがき」9、12頁。
- (8) 同上72、82頁。
- (9) 同上83頁。
- (10) Der Tagesspiegel, 14. 12. 1992.
- (11) ベルト・ジーグラー前掲訳書88頁。
- (12) インゴ・ハッセルバッハ前掲訳書60頁。
- (13) 以上の経緯はベルト・ジーグラー前掲訳書68-76頁。なお望田は DA と NA を「人的にも重なりあう類似の組織」とみているが(望田幸男前掲書170頁)、実体は本文で述べたような関係にある。
- (14) 同上63頁。
- (15) P. Förster, G. Roski, op. cit., S. 56.
- (16) インゴ・ハッセルバッハ前掲訳書60-66頁。
- (17) 同上88-91頁。
- (18) ベルト・ジーグラー前掲訳書203頁。
- (19) 同上12-19頁(以下ゾンタークの発言箇所はここからの引用である)。インゴ・ハッセルバッハ前掲訳書150-151頁。
- (20) 前掲「現代ドイツにおけるネオナチ・ユーゲントの文化(2)」34頁。
- (21)(22) インゴ・ハッセルバッハ前掲訳書150-151頁。
- (23) 同上89頁。
- (24) 同上148頁。
- (25) 同上156頁。
- (26) 同上156-157頁。

- (27) 「世代」文化については、K. マンハイム「世代の問題」(鈴木広訳)『マンハイム全集』3, 潮出版社, 1976年を参照。
- (28) ベルト・ジーグラー前掲訳書57-67頁。
- (29) 仲井斌前掲書231-232頁。
- (30) ベルト・ジーグラー前掲訳書37-56, 204-214頁。
- (31) ロストック事件については山本知佳子前掲書2-9頁が詳しい。1992年の事件簿については更に井手重昭「『ネオ・ナチ』論」, 『学苑』654号, 1994年, 3-4頁も参照。
- (32) 連邦刑事局報告, Der Spiegel, Nr. 24/47. Jahrgang, 14. Juni 1993, S. 21.
- (33) Der Tagesspiegel, 21. 1. 1993.
- (34) Der Tagesspiegel, 4. 2. 1993.
- (35) Der Tagesspiegel, 7. 2. 1993.
- (36) ベルト・ジーグラー前掲訳書206-207頁。
- (37) 同上204-206頁。
- (38) インゴ・ハッセルバッハ前掲訳書100-101頁。
- (39) ベルト・ジーグラー前掲訳書208頁。
- (40) Der Tagesspiegel, 4. 2. 1993.
- (41) Der Tagesspiegel, 20. 2. 1993.
- (42) Der Tagesspiegel, 20. 4. 1993.

Die Kultur der Neonazi-Jugend im Modernen Deutschland (3)

Mitsuo MASUI *

RESÜME

Was ist die Ursache von der Entstehung der Neonazi-Jugend im Modernen Deutschland ? Man versteht die folgenden drei Punkten als die Ursachen davon : (1) die Krise der Identität und Verlust des Lebensziels, (2) das Zusammenbrechende Familienleben, (3) die schlechte Anpassung des pluralistischen Werts. Aber konnten wir die Entstehung der Neonazi-Jugend durch dieser drei Punkte entsprechend verstehen ? Ist es denn möglich, daß die zweckmäßlichen Täten, die den Antisemus, Großdeutschismus, und Gewalt anrichten, im psychologischen Vakuum und somit ohne den starken Werken auf die Welt hervortreten ? Das alltägliche Lebenswelt der Jugend um Wende bringt uns das ganz anderen Resultat als das schon oben Verstandene.

[Inhaltsverzeichnis]

Einleitung

1. Die Möglichkeit des Verstehens der Kultur der Neonazi-Jugend
2. Das alltägliche Lebenswelt der Jugend um Wende
 - (1) Die Krise der Identität und Verlust des Lebensziels
 - (2) Das Zusammenbrechende Familienleben
 - (3) Die Alltäglichkeit der Gewalt in den Schulen
 - (4) Die schlechte Anpassung des pluralistischen Werts^(*1)
 - (5) Praktik des <höchsten> Werts
 - (6) Orietierung der starken Weltanschauung^(*2)
3. Organisationen und Täten des Neonazis^(*3)
4. Alltäglichkeit einer Neonazi-Jugend

Zusammenfassung

*1 Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 15, No. 1. 1995.

*2 Studies on History of Western Education, Vol. 24. 1995.

*3 Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 15, No. 2. 1996.